

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月2日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520023

研究課題名（和文） 意味の全体論とドイツ観念論

研究課題名（英文） Semantic Holism and German Idealism

研究代表者

入江 幸男（IRIE YUKIO）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70160075

研究成果の概要（和文）：ブランダムはヘーゲルの中に、クワインに始まる「意味の全体論」の先駆を見出したが、クワインとフィヒテとカントの判断論の詳細な吟味によって、意味の全体論の先駆がさらにフィヒテにまで遡ることができることを論証した。さらに現代の判断論にたいして、フィヒテ知識学から新しい視点を提供できる見通しを得られた。

研究成果の概要（英文）：R. Brandom has been pointed out that Hegel was a precursor of the semantic holism Quine claimed. I have showed that the precursor dates back to Fichte by a minute research of theories of judgments in Kant, Fichte, and Quine. Furthermore I can get a prospect that a new approach for theory of judgment is able to be given by the Fichte's Wissenschaftslehre

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：意味の全体論・ブランダム・マクダウェル・フィヒテ・ヘーゲル

1. 研究開始当初の背景

意味の全体論はクワイン以後広く受け入れられてきたが、近年意味の全体論をめぐる議論が活発に行われている。意味の全体論は多義的であるが、もっとも広い意味では、ある言明が意味を持つためには他の多くの言明も意味をもたねばならないという主張である。この意味の全体論は、指示の全体論や翻訳の全体論に深く関係しており、この主張

の影響は存在論や社会哲学など広汎な分野に及んでいる。他方で基礎的な部分では、意味の原子論（フォーダー）、意味の分子論（ダメット）との論争になっている。このように意味の全体論は現代哲学を考える上で非常に重要なトピックである。他方、この意味の全体論を最初に主張した哲学者として、ヘーゲルを再評価することが、ピッツバーグ大学の R. ブランダムと J. マクダウェルを中心に

活発に行われている。ピッツバーグ学派とも呼ばれ始めた彼らによるドイツ観念論の再評価は、ドイツのドイツ観念論研究者たちにも大きな影響を与えつつある。また日本でも、ブランダムやマクダウェルの仕事は、注目され始めており、『思想』(2008年7月号)ではマクダウェルの特集号が出版され、また日本ヘーゲル学会の第9回研究大会(2009年6月)ではシンポジウムとして「ドイツ古典哲学と(ポスト)分析哲学」が組まれるようになった(申請者もその提題者の一人となった)。申請者は長年、分析哲学とドイツ観念論(とりわけフィヒテ哲学)の両方に関心を持ってきた。分析哲学の成果を利用して、ドイツ観念論に新たな解釈をおこない、それによってドイツ観念論の可能性を発見したいと考えてきた。その成果の一部は『ドイツ観念論の実践哲学研究』(弘文堂)にまとめたが、最近ピッツバーグ学派の影響を受けて、単にドイツ観念論の再生というよりも、むしろドイツ観念論の見直しによって、現代の分析哲学に直接に貢献できる可能性があると考えられるようになった。そして、現代認識論における内在主義の立場がドイツ観念論、とりわけフィヒテ知識学と近いこと、後期フィヒテの意識論の中に現代の共有知識への重要な示唆となる部分があること、を明らかにし国際学会でも発表してきた。このような取り組みを、今後はフィヒテ哲学だけでなく、ドイツ観念論全般に広げて行いたい。その場合に明確な成果が最も期待できる課題は、意味の全体論をドイツ観念論の立場から再検討することであると考える。

2. 研究の目的

近年の分析哲学では、クワイン以後主流になっていた、意味の全体論、分析的真理の拒否、などの主張の見直しが行われている。また他方では、セラーズの「所与の神話」批判のもたらす深刻さが次第に明確になってきている。このような中で、分析哲学の立場からドイツ観念論の再評価が始まっている。この方向は、私のこれまでの研究関心に一致するものであり、ドイツ観念論の立場から現代の分析哲学研究に貢献できる可能性が現実のものとなりつつある。本研究は、とりわけ「意味の全体論」について活発になっている再検討に焦点を当てて、ドイツ観念論を分析哲学に生かすことを目指している。

3. 研究の方法

ドイツ観念論を現代の分析哲学の探求に生かすためには、両方の議論をよく知る必要がある。それは大変な作業である。そのた

めに、本研究では、「意味の全体論」に焦点を絞って探求を進める。まず、フィヒテの場合に、意味の全体論の主張、アプリアリな知識の主張、さらに基礎付け主義の主張が、どのように関係しているのかを調べる。ヘーゲルについては、先駆者であるブランダムの意味論を精読し、ヘーゲル哲学がどのように分析哲学に生かされているのかを調べたい。ブランダムはヘーゲルには詳しいが、フィヒテに注目していないので、フィヒテ哲学の洞察を、ブランダムの意味論に取り込みたい。次に、これらの作業を踏まえて、ブランダムの意味の全体論を、問答関係に注目することによって展開したい。最終的には、意味の全体論を踏まえて、存在論における反実在論と、社会哲学における強い意味の社会構築主義を提案したい。

4. 研究成果

初年度には、クワイン以後の「意味の全体論」の代表者の一人であるデイヴィッドソンの真理条件意味論と、これに対する代表的な批判者である Dummett の主張条件意味論、および分子論的意味論を詳細に検討した。Brandom は、Dummett と同じく Davidson の真理条件意味論批判、プラグマティックな意味論を主張する。しかし、Brandom は、Dummett と異なり意味の全体論を主張する。Brandom のこの意味の全体論の背後には Sellars がおり、さらにその背後にはパースやデューイのプラグマティズムがあり、さらにその背後にヘーゲルの影響がある。現代の意味の全体論者が、ヘーゲル哲学を再評価する思想的なつながりは明らかになった。

第二年度には、クワインの意味の全体論の検討を行い、それにもとづいて、フィヒテとクワインの比較、およびカントとフィヒテの判断論の比較を行った。もし意味の全体論を「弱い意味の全体論」と「強い意味の全体論」にわけるとすると、フィヒテとクワインはともに「強い意味の全体論」を取ることが検討の結果が明らかになった。クワインが、意味の全体論を採用しながらも、他方では理論の中心部と周縁部を分けるのと同様に、フィヒテもまた意味の全体論を採用しながらも、知識学の原則という中心的命題とそれから導出されるその他の定理にわかれるなど、類似した点がみられることも確認した。Brandom は、ヘーゲルがクワインに先駆けて「意味の全体論」を主張していたことを高く評価するのだが、上記の検討によって、そのヘーゲルに先駆けてフィヒテがすでに「意味の全体論」を主張していたことを明らかにした。

最終年度には、フィヒテの「意味の全体論」を、カントの判断論との詳細な比較検討を通して検討し、ネブラスカ大学での国際会議、およびボローニャ大学での国際フィヒテ協会で発表した。その後、そこで重要になったアプリアナ知識とアポステリアナ知識の関係を明らかにするために、後期フィヒテの『意識の事実』(1813)を検討して、日本フィヒテ協会大会で発表した。後期フィヒテは、知だけがあるといわず、存在ないし絶対者があるという。そのことは、フィヒテが一方で物自体を否定するにも関わらず、他方で存在を認めることは一見矛盾しており、そのことがこれまで多くのフィヒテ研究者にとっては不可解な事柄であった。しかし、最終年度にフィヒテの「意味の全体論」の内実をより詳細に分析する過程で、後期フィヒテの「存在」概念についても説得的な解釈が可能になり、それを同志社大学での哲学研究会で発表した。論文および口頭発表原稿は(公開権に触れない限り)私のHPで公開している。最終年度の研究成果はまだ論文にはなっていないが、さらに検討を加えて、今年中には、共著ないし雑誌論文として公開予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

IRIE YUKIO (単著), 'Eine Aporie der Fichteschen Wissenschaftslehre - Einige Schwierigkeiten mit der intellektuellen Anschauung' in "Fichte-Studien" Bd. 35, hrsg. von J. Stolzenberg und O-P. Rudolph, Editions Rodopi, pp. 329-337, 2010.

入江幸男 (単著), 「内在的基礎づけ主義とドイツ観念論」、『ヘーゲル研究』16号、2010、pp. 70-81.

IRIE YUKIO (単著), "Exploring the Possibility of the Unconscious Imitation of Others' Desires" in *Philosophia Osaka*, Nr. 6, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2011/3, pp. 63-73.

IRIE YUKIO (単著), "Identity Sentences as Answers to Question" in *Philosophia*

Osaka, Nr. 7, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2012/3, pp. 79-94.

入江幸男 (単著), 「意味の全体論とフィヒテの知識学」『フィヒテ研究』第20号、2012年11月、pp. 17-30.

[学会発表] (計11件)

IRIE YUKIO, "Was ist eine moralische Frage? -- Ein „dichtes“ moralisches Wort und die Würde des Menschen --", Internationale Tagung "Würde und Werte", am 14. Sep. 2010, Nanzan Universität

IRIE YUKIO, "How Is It Possible to Imitate Unconsciously a Desire of Another Person?", 第二回 IMITATIO、2010年12月18日、国際キリスト教大学

IRIE YUKIO, 'Philosophy in Japan after WWII' in the Pacific Division of APA in Seattle, April 6. 2012

IRIE YUKIO, 'Semantic Holism and Fichte's Wissenschaftslehre' in The Inaugural Conference For Kant, Fichte, and The Legacy of German Idealism, on April 9, 2012, at the University of Nebraska Omaha

IRIE YUKIO, 'Semantic Holism and Fichte's Wissenschaftslehre' in The VIII International Fichte Kongress, Bologna University, Sep. 19-22., 2012.

入江幸男, 「『意識の事実』と知識学の関係 —あるいは、アポステリアナ知とアプリアナ知の関係」日本フィヒテ協会大会シンポジウム「ベルリン期における知識学への準備講義」で発表、2012年11月12日、神戸UNIVERSITY。

入江幸男, 「翻訳の不可能性」Heidelberg Universität、翻訳学科、2012年12月11日

IRIE YUKIO, 'A Proof of Collingwood's Thesis', in Hegel Saal, Philosophische Seminar Heidelberg University, 18. Dec. 2012.

IRIE YUKIO, „Die große Veränderung der Geisteswissenschaften und Sozialwissenschaften in Japan nach 1990“, (1990年以後の日本における人文社会科学の変化), Institut für Japanologie Universität Heidelberg, 20. Dec.2012

入江幸男、「徹底的に純粋な観念論の限界——フィヒテが知の外部に絶対者を想定する理由——」同志社大学文学部哲学科 パネルディスカッション『フィヒテ後期知識学における絶対者と知』、同志社大学寧静館、2013年3月2日。

入江幸男、「討議倫理学から問答論的アプローチへ向けて」久高科研研究会、琉球大学法文学部、2013年3月23日。

[図書] (計1件)

IRIE YUKIO (共著), *Fichtes späte Wissenschaftslehre*, Verlag der Russische Cristliche Hunaitäre Academy, ST. Peterburg, p. 293, 2012. (担当論文 IRIE YUKIO (単著), Die Möglichkeit des kollektiven Wissens bei Fichte – Kiritik des „idealistischen Individualismus“ und das „Allgemeine Denken“ in „Die Thatsachen des Bewußtseyns“ (1810) pp. 272-282.)

[その他]

ホームページ等

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~irie/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

入江幸男 (IRIE YUKIO)
大阪大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：70160075

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし